

問答草（二）

一、勝つ道

乙「あなたに必ず勝つ法を教えましょうか。」

甲「教えてください。」

乙「負けることです。一から十まで負けることです。負けて負けて負けぬくことです。」

二、懺悔

甲「私はどうしても懺悔しません。どうしたら私の心は懺悔してくれましょうか。」

乙「それは無理です。私の心もかつて一度も懺悔したことなく、道を求めたことなく、人を救ったことなく、合掌したことなく、念仏したことなく、ただただ人を損ねてきたのみです。」

甲「え！……………？」

乙「あなたの罪業を抱いて大悲し、懺悔したもうは、如来の本願のみであります。貪欲、貪欲を知らず、瞋恚、瞋恚を知らず、愚痴、愚痴を知りません。ただ法蔵の本願のみが一切群生の煩惱を抱いて忍終不悔の一道に金剛不壊であります。なんじを救いたもうは、ただこの如来法蔵の本願のみであります。」

甲「わかりました。あいすまぬやつであります。高上がりしておりました。」

三、歡喜

甲「先生、私の心には歡喜が長続きしません。どうすればいいでしょう。」

乙「長続きしないどころか、あたまから無いのです。泣いたとて誠でなく、歡んだとて偽りです。変わる心が変わるになんの不思議がありません。貪欲が喜ぶのは五欲の満足だけです。その心に偽き欺かれずに、もつともつとありのままを凝視しなさい。自分の心を信じてはなりません。信ずべきは如来のみです。歡喜が問題になっている間、自分の心を信じようと言うのです。」

四、六字廃業

甲「お話を聞いてみると、私どもは、今日まで何をしていたのかわかりません。」

乙「よいことに気がつきました。たいがいの方は、話を聞く時や仏前のみで六字をひき出し、あとはたいがい六字ぬきで生きています。二六時中、六字を通して自己を見、人生を見、事を処していません。ひどい人は、自分の親や女房や子どもに接する時は、五十年一度も六字を通してできていない人があります。六字を通してやった気でも、まだ自分の正体を知らずに、幽霊で暮らしております。色身二法、六字になりきることに、すなわち身も心も南無阿弥陀仏になりきるまで聞かしていただきましょう。私が六字になるのでなし、六字こそ私になりきってくださいるのです。」

五、生きやすき道

乙「あなたの話を聞いてみると、あなたの周囲には、ずいぶんあなたの気に入らぬ人たちが多いようですね。」

甲「そうです。だれもかれも気に入らぬ者ばかりです。」

乙「それはあなたの邪見の相の現われであります。邪見の相の現われとわからないあなたは、ますますその一切を受け取ろうともしないで、それに悪の名をつけ、悪人として呪い憎み、攻撃しますから、ますますあなたの周囲の人から邪見をひき出します。一度合掌して、念仏の中にあなたの相を見つめ、気に入らぬ人たちの言うことの中に、あなたの相を見せていただきなさい。大きな徳を得させていただきつつ、しかも生きやすき道が必ず開けてきます。」

六、問題を受け取れ

乙「あなたをいちばん苦しめているのは何か。」

甲「それは私の兄との問題です。兄といつしよにいるのですが、父のない私にとっては兄はまったく絶対の権力で来ます。その兄との間がどうしても一つになれません。兄はとても我慢が強いのです。」

乙「あなたが道を求めはじめてから五年、念仏しているあなたが、その間、何日、合掌のすべてで兄さんに向いましたか。宿命を超えて、与えられた使命に生ききつたか。宿命の巖壁の手前で、同情者の安価な涙の中に、愚痴を言つて兄を責め呪い、あなた自身を弁解していたのでは、万年たつても問題は解決しないし、双方とも救われはしない。問題を受け取れ、はつきりと問題を受け取つて、その宿命の巖壁にぶちあたれ、如来の真実よりほかに天地を貫くものはない。その苦しみの彼岸から招喚したもう如来の勅命のままに、巖につきあつた時、その歩みの中に無碍道が開けるであろう。」

七、問題

甲「先生、私はいくら聞いても、何にも残りません。どうしたのでしょうか。」

乙「あなたには、人生に対する懷疑がない。考えている問題がない。あなた自身を成就しようとする願いが無い。真実教を求めようとする熱意がない。何も残らないのが当然である。」

八、二六時中

甲「生きていることの喜びがどうやらわかったようであります。私の周囲は苦悩にみちていますけれども。」

乙「それはありがたいことです。二六時中、念仏中心に生きぬいて、あなたを深めておゆきなさい。正法は耳で聞くべきでなくて、体解すべきであります。あなたの一生をしてただ正法のための一生になさい。」

九、割引なしに

乙「正法は割引なしに受け取りましょう。ただし書きなしに領解しましょう。」
甲「それはどういうことですか。」

乙「他力が無力とはき違えられ、凡夫の勝手を通さして、いよいよ凡夫の都合のいいようにお安くしたのが現在の真宗ではないか。お聖教のお言葉どおり、文字どおりをそのままに頂戴しましょう。一例をあげますと、聖人は『如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳も骨をくだきても謝すべし』と教えられました。まことにこれをそのままいたたく時、ちつともそうなっていない私が恥じられます。しかるに、『そんなに力むことはいらん、それができないのが凡夫だ。』と、教えをとって投げ棄てているのが今の浄土真宗です。そのほか、これにならつて考えたらわかります。」

一〇、修行

甲「光明団は他力ではない、自力だ、まるで修行することを教えると人が言います。」
乙「そのとおりです。修行をはなれて宗教はありません。遠くは、天親、曇鸞両師が、如実修行相応と説かれました。われらの念仏行が、如来の本願のお誓いのごとく、実のごとく相応していることであります。すでに修行の言葉が出ております。蓮如上人は御文章の中に『されば、聖人のいわく、たとい牛盗人とは言わるとも、もしは後世者、もしは善人、もしは仏法者と見ゆるように振舞うべからずとこそ仰せられたり。この旨をよくよく心得て念仏をば修行すべきものなり。』(二の二)と教えられました。」

3

お茶やお花の先生すら、大家になればなるだけ腕を磨くではありませんか。信仰は卒業ではありません。他力本願はいよいよわれらをして、精進修行せしめます。修行のないところには向上も発展もありません。往相回向の生活とは、いたずらに時を空費することではありません。ただ心すべきは、疑いも、自力も、ためにする功利的の心もないことで、蓮如上人のいわゆる報謝の太行であります。称名念仏なく、求道精進のないところに宗教があるだろうか。芽生えた木は太らずにはおきませぬ。閑人の言葉に耳をかさず、いよいよ不退の修行精進をお続けなさい。しかもそれを捧げて如来にかえすのです。聞けば聞くだけ、精進すればするだけ、お他力であることがわかつてきます。」

甲「間違っていました。」

一一、決定

甲「如来のお慈悲はありがたいと思いますが、どうも『いよいよいいか』ということになると、はつきりいたしません。なぜでしょうか。」

乙「それは真実信心でないから決定心がないのです。決定心がないとは、あなたのはからいがまじって不淳なのです。」

甲「どうしたらいいでしょうか。」

乙「もつと本気になつて聞きなさい。聞き方が足りないのです。」

甲「いくら聞いても同じことです。」

乙「あなたには、如来本願の勅命が、勅命になっていないので、通知になっているのです。大慈悲もただの同情になっていては、如来は唯一絶対の真実です。唯一絶対の真実があなたに向かつて無条件に働きかけ、あなたを根こそぎ動かして、浄土に向かつて唯一道を歩ましめんとするのであります。あなたは人間的なさまざまな声をもすべて真実であるとし、如来の声とも受け取ろうとする。人間の声か仏の声か、それすら選択できない。歸命とは仏の声を仏の声として聞く心です。したがってあなたの生活を見るがいい。そこにはつきりとした生活態度がない。水火を辞せず、み法を聞こうとする真剣さがない。あなたにとつては、唯一絶対な真実教も世間のさまざまな修養のお話ぐらいにしか響かない。疑うか、信ずるか、一歩から出直してかかることです。人生は、ただ、み法を聞いて生き、南無阿彌陀仏に生かされて一道を精進するよりほかに、なんらの意義を見出すことはできません。もつとはつきり腹を決めなさい。一度一切を無視して大法の前に絶対帰依なさい。大信心、大決定は如来の内容です、あなたには貪欲しかないので。大悲の中に全体を捨てきりなさい。蛇の生殺しでは百年たつてもだめです。」